

ライティングにおける語用論的誤りの回避

稲葉 みどり

(愛知教育大学 日本語教育講座)

How to check and reduce pragmatic errors in writing

Midori INABA (Department of Teaching Japanese as a Foreign Language, Aichi University of Education)

要約 「語用論的誤り」は、読み手と書き手の間のコミュニケーションを阻害する要因の1つである。本稿では、コミュニケーション研究における誤りの分析の結果から明らかになった語用論的誤りの傾向や問題点をふり返りながら、ライティングにおいて語用論的誤りをできるだけ少なくするにはどうしたらよいかを考える。特に、語用論的誤りに関わりが深い首尾一貫性、語用論的共有知識、結束性という観点から、パラグラフ構成、論理展開、前提・スキーマ、情報の選択、文脈・状況説明、指示表現、語句の代用・省略、語彙的結束性等に関してライティング上の留意点を具体的に提示する。そして、留意事項をプロセス・ライティングの理念にもとづく指導や学習で活用できるように「語用論的誤りのチェックリスト」としてまとめた。

Keywords: 英作文, ライティング, 語用論的誤り

1. はじめに

大学英語教育学会中部支部誤文研究会¹(筆者を含む)では、1997年より4年間にわたり「コミュニケーション²」という概念を導入してライティングの研究を推進した。この研究では、高校生の書いた英作文(日記)が読み手にどのくらい通じるかという観点(コミュニケーション)から、コミュニケーションの概念を尺度化して、読み手への伝達度を測定した(丹下他, 1998)。また、研究の過程では、コミュニケーションを念頭においた新しい誤りの分類(第2章参照)を考案し、読み手の理解を妨げる様々な要因やコミュニケーションを下げる誤り等を明らかにした(Tange et al., 1999; 丹下他, 2000)。この研究の概要や結果は、Tange et al. (2000)、宮田(2002)で詳しく報告している。

そこで、本稿では、このコミュニケーション研究から得られた知見を、より良いライティングにどう活かすかを模索し、実践的な指導や学習方法を考察する。ここで、指導と学習という両方の用語を用いるのは、学習者の英語学習を支援するという教師の立場から見れば、本稿での提案は一種の指導法であり、それをプロセス・ライティングの指導理念や学習者中心のカリキュラム等の中に位置付ければ、学習者がどのように学ぶかを具体的な方策として示すので、学習方法ということになるからである。

コミュニケーション研究における誤りの分析は英作文の学習や誤りへの対処に関して様々な示唆をしている。例えば、宮田(2002c)では、ライティング指導の基本的な考え方を「accuracy よりも fluency」「和文英訳よりも自由英作文」「形式よりも内容」に据えて、まず、自由にどんどん英文を書くことの重要性を説き、

書いた後の治療的指導の方法等を紹介している。また、石橋(2002)は、パラグラフ・ライティングにおける授業展開の実例、事前指導とその効果について述べている。さらに、木村(2002c)は、コミュニケーションを高める学習法など、実践例を種々盛り込み、教育現場への提言をしている。

これらの提案や提言は、実践的な指導法を中心としたものであるが、本稿では、理論的な側面からもライティング活動を考察する。ライティング活動の範囲も広げ、パラグラフ・ライティング(ジャーナル・ライティング)の基本から、それを発展させて、大学レベルでのエッセイ・ライティングやアカデミック・ライティングなどのより精緻な文章を書くことも射程に入れてライティング指導や学習を考察する。

本稿では、主に誤りの分析の結果から明らかになった問題点を念頭において、どのようにしたらコミュニケーションが高い文章が書けるかを考える。そしてコミュニケーションを下げる誤りを回避するための1つの手立てとして、推敲の段階で書かれた文章をいろいろな角度から検討するために最低限必要となる事項を提示する。

近年、第二言語習得研究の分野では、学習者が自分の誤りに気づくことが、誤りを矯正し、正しい言語習得を促すのに有効であることが検証されてきている。よって、ここでは学習者が自分自身の書いた文章の誤りや不備に気づくことの重要性に着目し、ライティング上の留意点、誤りを回避するための方策や注意事項を最終的には「作文チェックリスト」としてまとめた。そして、このチェックリストをプロセス・ライティングの理念にもとづいて、教育実践の場でどのように活用するかについても触れる。

2. 誤りの分類と誤りの分析の概要

コミュニケーションの概念を基にした誤りの新しいカテゴリーとは、「意味論的誤り」「論理的誤り」「語用論的誤り」「文法的誤り」の4種類で、読み手にどのように理解されるかという視点に立った分類方法である。「意味論的誤り」とは、用いられた語句や表現自体の意味に関するもので、読み手の正しい理解を阻む誤りである。「論理的誤り」とは、論理が飛躍していたり、論理に矛盾があるように思われて理解できない文や表現である。「語用論的誤り」とは、文章、談話レベルの誤りで、指示表現の解釈などにおいて、書き手の意図と読み手の解釈の間にずれを生じるものである。「文法的誤り」は、形態論、統語論と言われる分野を合わせたものと定義する³。

コミュニケーション研究では、これらの分類を用いて英作文の誤りを分析した結果、次のようなことが明らかになった。生徒の書いた英文の63.5%は何らかの誤りを含んでいた。この誤りを含む文の中で「正しく理解された文」の割合は61.4%、「正しく理解されなかった文」の割合は28.5%である。

また、全体の誤りの頻度を種類別に見ると、文法的誤りが一番多く、65.6%、次いで意味論的誤りの22.8%、語用論的誤り10.4%、論理的誤り1.3%である。

正しく理解されなかった文を誤りの種類別に見ると、意味論的誤りが38.4%、語用論的誤りが32.6%、文法的誤りが23.2%、論理的誤りが5.8%を占めていた⁴。

これらの結果から、次のようなことが言える。生徒の書いた英作文は誤りを含んでいるが、約6割は通じている。誤りを種類別に見ると、文法的誤りの頻度が一番高いが、通じるかどうかという観点から見ると、意味論的誤り、語用論的誤りの方が深刻度が高い。論理的誤りの頻度は低かったが、理解されにくいものが多い(原田, 2002)。

誤りの深刻度をコミュニケーション度(どのくらい通じるかという尺度⁵)からさらに分析した結果、語用論的誤りがコミュニケーションに影響を与える最も重大な要因であることが判明した⁶。よって、本稿では、語用論的誤りを取りあげ、語用論的誤りの分析から明らかになったライティング上の問題点を振り返りながら、その問題にどう対処するか、また、誤りを回避するためには、どのようにすれば良いかを考察し、ライティングの留意点を具体的に提示することにする。

3. 語用論的誤りとその種類

語用論的誤りとは、文章、談話レベルの誤りで、書き手の意図と読み手の解釈の間にずれを生じるもので、実際に見られた誤りに基づき、1) 指示表現や語句の指示対象が不明瞭である場合(VAG)、2) 指示表現や語句の指示対象が曖昧で2通り以上の解釈ができ

る場合(AMB)、3) 指示表現や語句が書き手が意図したことは違う事物や意味内容を指す場合(MLD)、4) 使われた語句の指示対象が文章中にない場合(REF)、5) 書き手と読み手が共有すべき知識(語用論的共有知識)の食い違いにより、語句が正しく理解されない場合(PUD)、6) 話題の混在(MTP)の6種類(括弧内はラベル)に下位区分される。以下、榎本(2002a, p. 45)より、例と簡単な説明を挙げる。

(1) VAG [Vague:不明瞭な]

<This> needs no explanation.

・前にいろいろなことを述べていると、thisが何を指し示すか不明瞭

(2) AMB [Ambiguous:曖昧な]

I like tennis and baseball and <it> is very interesting.

・itが受けているのがtennisかbaseballか曖昧

(3) MLD [Misleading:誤解を招く]

I bought her some pictures. She was glad to see <it>.

・itが意図したものは別のものを指してしまう可能性がある

(4) PUD [Pragmatic Universe of Discourse:共有世界]

<J League> was opened, so I was very glad.

・J Leagueのことが共有知識でなければ、J Leagueが何を指すのか分からない

(5) REF [No referent:指示物の欠如]

I want to join <it>.

・itが指すべきものが文の前にない

(6) MTP [Mixed Topics:話題の混在]

<The move was good, and Mary went out with my friend.>

・内容に関連性がない

4. 語用論的誤りの傾向

英作文における語用論的誤りの傾向を見ると、話題の混在に代表されるように、パラグラフにおける話題の統一性の欠如、唐突な話題の転換等、文章の首尾一貫性に関わるものがコミュニケーションを下げる深刻な要因となっていた。また、語用論的共有知識の相違により読み手に正しく理解されなかったり、誤解を招いたりする場合も見られた。さらに、指示対象が不明瞭、曖昧、文中に存在しないなど、文と文の結束性の不備に関わる誤りの頻度も高かった⁷。すなわち、語用論的誤りに見られる問題点は、首尾一貫性(coherence)の欠如、語用論的共有知識の相違、結束性(cohesion)の不備という3つに集約され、これらの点に配慮して書くことの重要性が示唆された。よって、語用論的誤りの回避に関して、この3つの観点から考察する⁸。

5. 文章の首尾一貫性

首尾一貫性とは、文章全体の意味構造や統一性のことで、文章には不可欠の要素である(Halliday and Hasan, 1976)。Canale (1982) は、文章が首尾一貫性を備えるための条件として、1) 考えの提示方法が順序立っていて方向性があり、筋道が通っていること、2) 事実・意見・書き手の視点・前述の考への言及等に連続的、継続的で統一性があり、新しく導入される考えも関連していること、3) それぞれの考えに相対的な強調が置かれていて、主題文、支持文、結語文が調和して論が組み立てられていること、4) 考えがディスコースを通じて十分に提示され、論考されていることの4点を挙げている。

生徒の書いたパラグラフの中には、文章の途中で文脈がわかりにくくなった場合や、1つのパラグラフ内で話題が混在しているため、つじつまが合わず理解できないものが見られた。よって、以下では、パラグラフの構成、論理の展開、文章の構成に関する留意事項取り上げる。

5. 1 パラグラフの構成

1つのパラグラフでは、1つの話題にしぼって内容を展開し、話題を転換する場合は、パラグラフを改めるようにすることが、統一性のある文章を書く上での大原則といえる。それを踏まえた上で、パラグラフの構成を考える。例えば、導入文・展開文・結語文で成り立っているか、または、主題文・支持文・(結語文)から成り立っているか等に関して、以下の項目を参考にして確認する。

- (1) 1つのパラグラフに1つ以上の話題が混在していないか
- (2) 段落の冒頭に、話題を読者に知らせる(暗示する)文(導入文)があるか
- (3) 詳しく論じたり、説明したりする文(展開文)があるか
- (4) 一般論、主題、要点など、段落を締めくくる文(結語文)があるか
- (5) 一番言いたいこと、意見、考え(主題・主旨)を示す文(主題文)があるか
- (6) 主題文で陳述したことに関する事例、証拠、理由などを詳しく述べる文(支持文)があるか

5. 2 論理の展開

パラグラフ内で考えが十分披露され、論理の展開がうまくいっているかを確認する。また、パラグラフが展開し過ぎていたり、展開が不十分ではないかどうか等、以下の点に気をつける。

- (1) 考えの提示方法は順序立っているか
- (2) 言いたいことが十分に論考されているか
- (3) 論理の矛盾はないか

- (4) 文中に適当な例が提示されていて、読み手にわかりやすい文章であるか
- (5) 論旨と直接関係のないことが混入していないか(展開し過ぎのパラグラフ)
- (6) 展開が不十分ではないか

5. 3 文章の構成

パラグラフ・ライティングを発展させて、エッセイ・ライティングやアカデミック・ライティングを行う場合、複数のパラグラフで文章を構成しなければならない。この場合、パラグラフ間の関係やつながり、個々のパラグラフの役割等を考えて、文章を組み立てる必要がある。また、文章はジャンルによって固有の文章構造をもっている。例えば、「序論・背景・議論・結論」という文章構造は科学論文でよく使われるものの1つである。よって、文章のジャンルに相応しい構造で書くことも大切である。以下に文章の構成に関わる確認事項を挙げる。

- (1) 文章の構成(例、序論、本論、結論)は整っているか
- (2) 個々のパラグラフの役割(例:比較対照・原因結果・問題解決・意見と理由)は何か
- (3) パラグラフ間の関係は明確か

6. 書き手と読み手の間の共有知識

語用論的誤りの中で、2番目に頻度が高かったのが、語用論的共有知識の食い違い(PUD)である。文章(書かれた内容)を読み手に正しく理解してもらうには、書き手と読み手の間に語用論的共有世界が築かれなければならない。書き手が読み手が有しているだろうと想像する知識と、読み手が実際に持っている知識の間に食い違いがある場合、両者のコミュニケーションはうまくいかないからである。実際に、生徒の書いた作文の多くは、読み手が持っている想定した知識を実際には読み手が持っていなかったのが原因で、内容や意味が正しく伝達されなかった。よって、ここでは、語用論的共有知識に関わる具体的な内容として、読み手は誰か、前提・スキーマ²⁾、用語の知識、情報の取捨選択、文脈・状況説明の5項目を取りあげ、読み手にわかる文章を書くための留意事項を提示する。

6. 1 読み手は誰か

文章を書く時に、まず念頭におかなければならないのが、読む人は誰かである。読者が誰かによって、盛り込む情報、丁寧さ、内容の伝達方法など当然のことながら、書き方が変わってくる。はじめから特定の読み手を対象として書く場合は、読み手のことがある程度わかっているので、情報の選択は比較的容易である。しかし、一般の読者を対象に書く場合は、情報選択を的確に行うのは結構むずかしく、慎重に行う必要がある。

ろう。例えば、手紙文（私信）などのように、読み手が特定の人の場合は、共有世界がつくりやすく、比較的容易である。しかし、読み手が特定されていない場合は盛り込む内容の選択をさらに慎重にしなければならない。以下、書く場合の読み手に関する基本的な留意項目である。

- (1) 読み手は書き手と同じ共同体の人か
- (2) 読み手は書き手と同じような経験を持っているか
- (3) 読み手は話題に関する背景知識があるか

6. 2 前提・スキーマ

文章が正しく理解されるためには、書き手と読み手の間で、前提とする事柄が一致していなければならない。生徒の書いた英作文では、読み手の文化にはない語句、概念等が誤解を招いたり、正しい情報の伝達を阻害している事例等が見られた。特にスキーマの違いに起因する解釈の相違は、誤解していても気づきにくく、より注意が必要である。よって、以下のような点に注意し、常に気を配る必要がある。

- (1) 書き手と読み手の前提とする事実は同じか
- (2) 書き手と読み手のスキーマの違いはないか
- (3) 書き手と読み手の習慣の相違はないか
- (4) 英米語で意味・概念の相違はないか
- (5) 共有世界を構築するために必要な説明や文脈が与えられているか

6. 3 用語

用語にも注意しなければならない。生徒の書いた英作文の中で、コミュニケーションが非常に低かったものに、読み手が知らない用語を何の説明もなくいきなり用いた場合があった。例えば、固有名詞や専門用語などで、書き手は熟知しているが、読み手は知らない用語である。よって、特別な用語を用いる場合には、読み手がその用語を知っているかどうか考える。知っていれば、くどくどした説明は不要である。あまりよく知らないと思われる場合は、記述内容に応じて、最低限、理解に必要な説明を付ける必要がある。施した説明、共有知識も含めて、与えられた文脈から、正しく理解可能かどうかを確認する。

- (1) 読み手はその用語を知っているか
- (2) 用語の適当な説明はあるか
- (3) 用語の社会的、文化的背景による意味・概念の相違はないだろうか
- (4) 用いた固有名詞は周知のものか
- (5) 固有名詞に適切な説明を付けているか

6. 4 情報の取捨選択

一般に文章を書く場合、すべてにわたって詳細に書くのではなく、情報を選択して必要な情報だけ盛り込

んで書く。読み手にわかってもらうには、事柄をどこから説明するか、どの程度説明するかをよく考えて書く必要がある。書かなくてもわかることは、省いたほうが簡潔でわかりやすい文章になる。必要以上の情報は、かえって混乱を招く。ただし、盛り込む情報の選択は容易ではない。コミュニケーションが低かった多くの作品を見ると、「書かなくてもわかるだろう」と期待（予測）して書いた事柄が、実際には読み手に的確に伝わっていなかったからである。以上の点をまとめて、情報の取捨選択に関する留意事項とする。

- (1) 必要な情報はすべて盛り込まれているか
- (2) 不要な情報はないか
- (3) 情報過多はないか
- (4) 「書かなくてもわかる」という予想は適切か
- (5) 「わかってくれるだろう」という甘えはないか

6. 5 文脈・状況説明

文脈が不足していると、読み手一般的な知識や自分の経験等に基づいて、推測しなければならない。正しく推測してくれればいいが、そうとは限らない。生徒の誤りを分析すると、指示対象や動詞、句などの意味を把握する際に誤解を誘発するような誤り(MLD)が種々見られた。その原因として、話題になっている事柄の説明不足、文脈から十分な情報が提供されていないことなどが明らかになった。よって、内容を理解するのに必要な状況説明や、文脈は与えられているか確認する。

- (1) 状況説明はあるか
- (2) 文脈が与えられているか
- (3) 順序立てて説明しているか
- (4) 唐突な文（内容）はないか

7. 文章の結束性

結束性とは、文と文の意味上の結びつきを表す概念である(Halliday and Hasan, 1976)。個々の文がまとまりのある文章（パラグラフ）になるためには、結束性が保たれていなければならない。首尾一貫性が文章の内容や意味上での統一性に関して用いられるのに対して、結束性は文章の表層構造に表れた明示的結びつきを表し、首尾一貫性と相補的な概念である。

結束性には文法的結束性と語彙的結束性がある。文法的結束性とは、文法により示された文と文（または、節と節）の間の意味のつながりで、Halliday and Hasan (1976)は、「指示、代用、省略、接続」の4つの下位範疇を挙げている。「指示」とは、人称詞、指示詞、比較語等の語句がそれ自体で意味解釈されるのではなく、何か指す物を特定して解釈されること、「代用」とは、ある語句を別の語句に置き換える操作のこと、「省略」とは、書かなくても読み手が復元できる語句を省くこと、「接続」とは、接続表現を用い

て文と文（節と節）の関係を示すことである。

語彙的結束性とは、語彙の選択によって得られる結束的効果である。例えば、一度言及した内容に関して、再び言及する場合（再叙：reiteration）、同一語、同義語、上位語、一般語等を用いて言い換えることにより語彙的な結束効果が得られる¹⁰。

文を連ねていく場合には、文と文（節と節）がどのような関係でつながっているかを示す手がかりが必要である。その手がかりは、一般に文法的な結びつき（文法的結束性）や語彙的な結びつき（語彙的結束性）により与えられる。代名詞などの指示表現の指示対象が特定できないという問題は、言い換えれば、文章（パラグラフ）の結束性がうまく保たれていないということである。文と文の結束関係がうまく結ばれていないと、読み手には理解しづらいものとなるだろう。ここでは、文章を書く場合、結束関係がうまく保たれているかどうかを確認し、より結束性の高い文章を書くための留意点を指示表現、定冠詞、語句の代用・省略、語彙的結束性の4点¹¹にまとめて提示する。

7. 1 指示表現

語用論的誤りの中で一番頻度が高かったのは、指示物や指示内容が不明瞭な誤り（VAG）である。例えば、代名詞などの指示表現がいったい何を指しているのか読みとれず、文の意味が不明瞭になったり、指示物が曖昧である場合である。また、指示対象が文中に見つからない場合(REF)もあった。代名詞などの指示表現の指示するものが正確に読み手にわかるかどうか、以下に点検項目を挙げる。

- (1) 代名詞等の指示対象が明確で、指示物が特定できるか
- (2) 指示表現は文法的に正しく、単数・複数・人称などの誤りはないか
- (3) 指示表現の指示対象が文章中に存在するか
- (4) 指示対象は曖昧ではないか。
- (5) 意図と違う指示対象を指し示していないか

7. 2 定冠詞

冠詞に関する誤りは、非常に多く見られた。その中でも特に読み手の誤解を引き起こしたのが、定冠詞に関わるものであった。本来つけるべきでない名詞（名詞句）に、誤って定冠詞をつけると、思わぬ誤解を引き起こしかねない。特に、読み手が誤用と気づかない場合も多く、それだけに深刻である。よって、定冠詞が正しく用いられているか、また、その場合、指示対象は文中に存在するか等を確認する必要がある。指示対象が文章中ではなく、共有知識の中に存在する場合もあるので、合わせて用法を確認する。また、固有名詞に定冠詞を付けると特別な意味になる場合があるので、注意が必要である。以下、確認事項である。

- (1) 定冠詞は正しく用いられているか
- (2) 文章中に指示対象が存在するか
- (3) 共有知識の中に指示対象が存在するかの
- (4) 固有名詞に定冠詞を付けていないか
- (5) 固有名詞に付けた定冠詞の場合、語句の意味は妥当か

7. 3 語句の代用、省略

代用¹²や省略は、結束性を保つために重要な操作である。代用とは、一度出てきた語句を適切な語句で言い換えることである。代用による言い換えの基本的な方法を、以下に7つ挙げる（橋内, 1995）。

- (1) 名詞（句）→代名詞（例. Mary →she）
- (2) 副詞（句）（時と場所の名詞）→副詞（例. at ten →then, to the library→there）
- (3) 文→代名詞（例. Taro and Hanako were divorced last week.→It was quite unexpected.）
- (4) 先行する名詞句→限定詞（例. an English dictionary → the, this, that, former, latter など）
- (5) 類義語を用いる（例. poetry →poems）
- (6) 全体と部分（または部分と全体）の関係を表す構造を用いる（例. gardening tools → a shovel, a hand fork, and a trowel, a watering can.）
- (7) 関連語（派生語）を用いる（例. sing →singer）

省略は、「ゼロによる置き換え」とも考えられ、既に出てきた表現をそっくり繰り返すのを避けたり、書かなくても読み手が復元できる語句を省いたりすることである。以下、代用や省略に関する確認事項の大枠である。

- (1) 一度でてきた語句をそっくりそのまま繰り返してはいないか（キーワードは除く）
- (2) 一度出てきた語句の言い換え（代用）は文法的に正確か
- (3) 一度出てきた語句の言い換え（代用）は語彙的に適切か
- (4) 読み手が復元できる部分を省略しているか
- (5) 省略のしかたは文法的に適切か

7. 4 語彙的結束性

文章の語彙的な結びつきを考えてみよう。まず、文章（パラグラフ）のキーワードは何か確認する。普通、キーワードは繰り返し使われる。一方、英語では、キーワードか並立表現以外は、同じ語を繰り返し文章の中で使わずに、別の語句で言い換えるのが一般的である。例えば、1つの内容について再び言及する場合（再叙）、同一語、同義語、上位語・下位語、一般語、指示語等を用いて言い換えることが可能である。自然な英語の文章を書くには、文法的結束性だけでなく、

語彙的結束性にも注意を払うことが重要である。以下、キーワードや語彙的結束性の確認の手がかりとなる項目である。

- (1) キーワードは何か
- (2) 既出語彙を別の語彙で言い換えているか

参考：同一語の繰り返し

上位語・下位語（例：flowerと rose）

同意語・類義語（例：simpleと plain）

個別語・一般語（例：Japanと country）

名詞・指示語（例：presentと it）

- (3) 言い換えの方法は適切か

8. パラグラフ・ライティングと語用論的誤り

パラグラフ・ライティングは、あるまとまった内容の文章が自由に書けるようになるための学習法（指導法）の1つである。和文英訳が主として英語の文法、語法、表現などを習得するための文字による練習であるのに対して、パラグラフ・ライティングは、ある程度まとまった量の文章を書くことにより、作文の内容、構成の方法等を学習するための練習形態といえるだろう。

したがって、書き言葉の様々な規則、文と文の意味上のつながり（結束性）、文章の意味上の統一性（首尾一貫性）、パラグラフの構造、パラグラフ相互の関係などについての理解を深め、ライティングにそれらの知識が活用できるようにすることが目標となる。特に語用論的誤りの分析から明らかになった問題点は、文レベルではなく、ディスコースレベルでの不備や誤りで、パラグラフ・ライティングの指導に関わりが深いと考えられる。

9. 語用論的誤りのチェックリスト

以上、語用論的誤りの分析からコミュニケーションを下げた要因となった事項について、それに対処するためにはどうしたらよいかを考察してきた。そして、前章までに提示した語用論的誤りを回避するための留意点や確認事項を整理して、「語用論的誤りのチェックリスト」として一覧表（文末参照）にまとめた。点検項目の中には、多少重複しているように思われる内容もある。これは重複というより、どちらの事項にも関わりが深いということである、何度も出てくる項目は、どのような観点から見ても重要であるという証拠でもある。よって、類似項目でもいろいろな角度から何度も点検することは、重要であると考え、繰り返しリストに入れた。

10. プロセス・ライティングとチェックリスト

プロセス・ライティングは、書く過程を重視したライティング活動で、White and Arndt (1991)、橋内(1995)によれば、ライティングは、1) 相談と共同作

業 (Conferencing and Sharing), 2) 準備 (Pre-writing), 3) 下書き (Drafting), 4) 修正 (Revising), 5) 校正と校訂 (Proofreading and Editing), 6) 公表 (Publishing) の6つの段階を経て完成する。相談と共同作業や準備の段階では、テーマを設定し、アイデアをふくらませ、執筆の構想を立てる作業を行う。下書きの段階ではアイデアを整理し、読者を想定し、語彙を選び、文章を組み立てる。修正の段階では、書いた内容を吟味し、推敲する。校正と校訂の段階では、修正を終えた原稿のスタイルや仕上がりが適切かどうかさらに点検する。この作業は、必ずしも書き手本人だけで行うのではなく、書き手以外の人（例えば、教師や級友）に目を通してもらうことも大切である。

本稿で提示したチェックリストは、このプロセス・ライティングにおいては、下書き、修正、校正と校訂の段階で書いたものを検討するのに利用可能である。チェックリストを手がかりに、文章を繰り返し点検することにより、不備な点や誤りに気づき、読み手に分かりやすい文章を書くことができる。また、このチェックリストは学習者自身が書いたものを内省するための留意事項と捕らえてもよいし、教師が作文指導をする場合の指導項目と考えてもよいであろう。最後に、本稿で作成したチェックリストは、語用論的誤りの分析で深刻度が高かった誤りを中心に取り扱ったもので、必要事項の全てを網羅しているものではない。今後、本稿を読まれた方々より多くのご教示いただき、点検項目を充実したものにできれば幸いである。

注

¹ 研究会のメンバーは以下の通りである。丹下省吾（研究会代表：名古屋外国語大学[当時]）、藤吉陸夫（研究会副代表：金城学院高等学校[当時]）、石橋千鶴子（愛知淑徳大学）、稲葉みどり（愛知教育大学）、梅澤敏郎（岐阜市立女子短期大学）、榎本喜夫（名古屋短期大学）、尾関直子（大東文化大学）、木村友保（名古屋外国語大学）、原田邦彦（名古屋外国語大学）、前田アンドレア（名古屋経済大学短期大学部）、宮田学（名古屋市立大学）

² 木村（1996）で最初に提案された。詳しくは、木村(2002a)参照。

³ 詳しくは、榎本(2002a)参照。

⁴ データは宮田(2002b)より抜粋。

⁵ 厳密な定義は、木村(2002b)参照。

⁶ 詳しくは榎本(2002b)参照。

⁷ 詳しくは稲葉(2002b)参照。

⁸ 稲葉(2002a)では、第二言語としての日本語作文の誤用を分析した。その結果、語用論的誤りについては、英作文とよく似た問題点が明らかになった。

⁹ ある事柄に関して、通常予期されるパターンとして、過去の経験に基づいて長期記憶内に貯えられ

ている先在的知識構造(pre-existing knowledge structure)のことで、日常的に経験する事物・出来事・状況・活動とそれらの連続を理解するのに利用している。書かれたり、話されたりしていない事柄を自動的に解釈できるのはこの知識構造があるからである。

¹⁰Halliday and Hasan (1976)によれば、再叙による語彙的結束性と指示(reference)による文法的結束性との間の境界は、決してはっきりしたものではない。

¹¹接続に関しては、他稿に譲る。

¹²指示表現もいわば代用の1つと考えられる。

参考文献

- Canale, M. (1982). *Evaluating the coherence of student writing in L1 and L2*. Paper presented at the Annual TESOL Convention, Honolulu, Hawaii.
- Halliday, M. A. K., & Hasan, R. (1976). *Cohesion in English*. London: Longman.
- Tange, S., Enomoto, Y., Harada, K., Inaba, M., Ishibashi, C., Kimura, T., Maeda, A., Miyata, M., & Umezawa, T. (1999, August). "Communicability and its relevance in EFL writing classes. Paper presented at the 12th World Congress of the International Association of Applied Linguistics (AILA '99 Tokyo), Waseda University, Tokyo, Japan.
- Tange, S., Enomoto, Y., Harada, K., Inaba, M., Ishibashi, C., Kimura, T., Maeda, A., Miyata, M., & Umezawa, T. (2000). "Communicability" and its relevance in EFL writing classes. The Sentence-Error Study Group, the Chubu Chapter of JACET.
- White, R., & Arndt, V. (1991). *Process writing*. Harlow, Essex: Longman.
- 榎本喜夫. (2002a). 「どのように分析したか」, 宮田学編『ここまで通じる日本人英語—新しいライティングのすすめ』, 大修館書店, pp. 30-50.
- 榎本喜夫. (2002b). 「誤りの傾向と特性」, 宮田学編『ここまで通じる日本人英語—新しいライティングのすすめ』, 大修館書店, pp. 133-161.
- 原田邦彦. (2002). 「どういふ場合に通じなかったか」 宮田学編『ここまで通じる日本人英語—新しいライティングのすすめ』, 大修館書店, pp. 68-82.
- 橋内武. (1995). 『パラグラフ・ライティング入門』, 研究社出版.
- 稲葉みどり. (2002a). 「日本語作文の誤文分析—読み手の理解を妨げる要因」, 『教養と教育』, 2, pp. 27-98.
- 稲葉みどり. (2002b). 「どのような語用論的誤りがコミュニケーションを下げたか」, 宮田学編『ここまで通じる日本人英語—新しいライティングのすすめ』, 大修館書店, pp. 103-132.
- 石橋千鶴子. (2002). 「パラグラフ・ライティングの学習」, 宮田学編『ここまで通じる日本人英語—新しいライティングのすすめ』, 大修館書店, pp. 211-221.
- 木村友保. (1996). 「生徒の書いた英作文のコミュニケーション」. Step Bulletin, 8, pp. 120-126.
- 木村友保. (2002a). 「コミュニケーションとは何か」 宮田学編『ここまで通じる日本人英語—新しいライティングのすすめ』, 大修館書店, pp. 13-18.
- 木村友保. (2002b). 「どのような調査をしたか」 宮田学編『ここまで通じる日本人英語—新しいライティングのすすめ』, 大修館書店, pp. 19-29.
- 木村友保. (2002c). 「コミュニケーションを高める学習法」 宮田学編『ここまで通じる日本人英語—新しいライティングのすすめ』, 大修館書店, pp. 190-194.
- 宮田学. (2002a). 「日本の英語教育にはどんな問題があるのか」, 宮田学編『ここまで通じる日本人英語—新しいライティングのすすめ』, 大修館書店, pp. 3-12.
- 宮田学. (2002b). 「こんなに通じた日本人英語」, 宮田学編『ここまで通じる日本人英語—新しいライティングのすすめ』, 大修館書店, pp. 51-67.
- 宮田学. (2002c). 「文法的誤りにどう対処するか」, 宮田学編『ここまで通じる日本人英語—新しいライティングのすすめ』, 大修館書店, pp. 162-185.
- 宮田学編. (2002). 『ここまで通じる日本人英語—新しいライティングのすすめ』, 大修館書店.
- 丹下省吾他. (1998, September). 「日本人の書いた英作文の『コミュニケーション』—尺度化の原理と応用」, 第37回大学英語教育学会全国大会発表, 就実女子大学, 岡山市.
- 丹下省吾他. (2000, November). 「意味論・語用論から見た『コミュニケーション』」, 第39回大学英語教育学会全国大会発表, 沖縄国際大学, 宜野湾市.

語用論的誤りのチェックリスト

1. 首尾一貫性

<パラグラフの構成>

- 1つのパラグラフに1つ以上の話題が混在していないか
- 段落の冒頭に、話題を読者に知らせる（暗示する）文（導入文）があるか
- 詳しく論じたり、説明したりする文（展開文）があるか
- 一般論、主題、要点など、段落を締めくくる文（結語文）があるか
- 一番言いたいこと、意見、考え（主題・主旨）を示す文（主題文）があるか
- 主題文で陳述したことに関する実例、証拠、理由などを詳しく述べる文（支持文）があるか

<論理の展開>

- 考えの提示方法は順序立っているか
- 言いたいことが十分に論考されているか
- 論理の矛盾はないか
- 文中に適当な例が提示されていて、読み手にわかりやすい文章であるか
- 論旨と直接関係のないことが混入していないか（展開し過ぎのパラグラフ）
- 展開が不十分ではないか

<文章の構成（発展）>

- 文章の構成（例、序論、本論、結論）は整っているか
- 個々のパラグラフの役割（例：比較対照・原因結果・問題解決・意見と理由）は何か
 - 比較対照
 - 原因結果
 - 問題解決
 - 意見と理由
- パラグラフ間の関係は明確か

2. 語用論的共有知識

<読み手は誰か>

- 読み手は書き手と同じ共同体の人か
- 読み手は書き手と同じような経験を持っているか
- 読み手は話題に関する背景知識があるか

<前提・スキーマ>

- 書き手と読み手の前提とする事実は同じか
- 書き手と読み手のスキーマの違いはないか
- 書き手と読み手の習慣の相違はないか
- 英米語で意味・概念の相違はないか
- 共有世界を構築するために必要な説明や文脈が与えられているか

<用語>

- 読み手はその用語を知っているか
- 用語の適当な説明はあるか

- 用語の社会的、文化的背景による意味・概念の相違はないだろうか

- 用いた固有名詞は周知のものか
- 固有名詞に適切な説明を付けているか

<情報の取捨選択>

- 必要な情報は盛り込まれているか
- 不要な情報はないか
- 情報過多はないか
- 「書かなくてもわかるだろう」という予測は適切か
- 「わかってくれるだろう」という甘えはないか

<文脈・状況説明>

- 状況説明はあるか
- 文脈が与えられているか
- 順序立てて説明しているか
- 唐突な文（内容）はないか

3. 結束性

<指示表現>

- 代名詞等の指示対象が明確で、指示物が特定できるか
- 指示表現は文法的に正しく、単数・複数・人称などの誤りはないか
- 指示表現の指示対象が文章中に存在するか
- 指示対象は曖昧ではないか。
- 意図と違う指示対象を指し示していないか

<定冠詞>

- 定冠詞は正しく用いられているか
- 文章中に指示対象が存在するか
- 共有知識の中に指示対象が存在するか
- 固有名詞に定冠詞を付けていないか
- 定冠詞を固有名詞に付けた場合は語句の意味は妥当か

<代用・省略>

- 一度でてきた語句をそっくりそのまま繰り返してはいないか（キーワードは除く）
- 一度出てきた語句の言い換え（代用）は文法的に正確か
- 一度出てきた語句の言い換え（代用）は語彙的に適切か
- 読み手が復元できる部分を省略しているか
- 省略のしかたは文法的に適切か

<語彙的結束性>

- キーワードは何か
- 既出語を別の語で言い換えているか
 - 同一語の繰り返し
 - 上位語・下位語
 - 同意語・類義語
 - 個別語・一般語
 - 名詞・指示語
- 言い換えの方法は適切か